

教育広報

かけはし

第3号 平成4年3月19日発行

発行 千代田区教育委員会



お年寄りを囲んで
楽しい「ふれあい給食」
(富士見小にて)

主
な
記
事

- ◆小学校にニューフェイス
“生活科”誕生
- ◆Q & A 区立学校の適正規模化・適正配置
- ◆「みんな元気で歩こう会」のご案内
- ◆みんなほのぼの「ふれあい給食」

*教育広報「かけはし」は資源保護
のため再生紙を使用しています。

生活科誕生！

平成四年四月から、小学校で新しい学習指導要領による教育が実施されます。

今回の十二年ぶりの指導要領の改訂により、一・二年生の社会科と理科にかわって「生活科」という新しい教科が設けられることになりました。小学校における教科の新設は、戦後教育四十数年にして初めてのことで

すでに三年前から、各小学校では生活科実施への試みとして、さまざまな実践を行なっております。

○生活科のねらいは

生活科のねらいは、「具体的な活動や体験を通して、身近な社会や自然とかかわりに関心をもち、自分の生活について考えていく過程で生活上必要な習慣や技能を身につけ、自立への基礎を養う」ことです。

つまり、「見る」「調べる」「作る」「探す」「育てる」「遊ぶ」などの活動を行ない、それを絵や言葉、動作、劇などで表現することが学習の中心となります。教室で先生の話

外を問わず、広く子どもの生活圏全体を学習の場として、からだ全体で学ぶこととなります。

○社会や自然をとらえるとは

生活科では自分と身近な社会や自然とかかわりを大切にします。社会とかかわりとは、学校や家庭の様子などがあれこれとわかることだけではなく、自分もその中で生活する一員として、よりよく生活ができるようになることです。

自然とかかわりとは、ただ単にアサガオの特徴やザリガニの様子などに気づかせるだけがねらいではありません。動植物を大切にしたり、愛情をもって育てたりすることが求められ、時に生き物の死に直面するということも大切な学習となります。

○自分自身への気づきとは

生活科は、自分自身に気づくことと、自分をよりよく生かすことを学ぶことです。

つまりみんなと一緒に遊び、学習することを通して、仲間意識を育て、ともに生活できるようになることです。自分の成長に気づくことから、

それを支えてくれた多くの人々の存在に気づき、それらの人々に感謝の気持ちをもつことです。

また、自分のよいところや得意としていることに気づかせることによって、やる気と自信をもたせるようにすることです。

○生活上必要な習慣や技能とは

生活科では子どもが意欲的に取り組む活動を通して、基本的な生活習慣や生活技能を身につけさせることをめざしています。その内容としては、

- ①手や体を上手に使い、友だちと協力して活動や体験ができる。
- ②日常生活における整理、整頓あるいは遊びや活動に必要な用具などの準備や後始末ができる。
- ③あいさつや話し合い、ルールなど日常生活に必要なことを大切にして、仲良く生活することができ。
- ④相手に気を配って、接することができる。

○自立への基礎とは

小学校一・二年生に求められる自立への基礎とは、自分のことが自分ででき、学級や学校といった集団あるいは社会の一員として集団生活ができるようになることです。

また、学習活動や集団活動において、自分の考えや意見をはっきりと述べることでできるとともに、身近な社会や自然の中に生きる人間として、環境に積極的に働きかけることができるようになることです。

○生活科の主な内容は

- 一年生では、①私の学校 ②生き物と友だち ③みんなで使うもの ④遊ぶ物を作る ⑤みんなの一年間 ⑥生きたての卵 ⑦町の探検 ⑧生き物の世話 ⑨風で動くおもちゃ ⑩子ども祭り ⑪電話と手紙 ⑫きせつとくらし ⑬私のアルバム などがあります。

生活科は、子どもにとって魅力のある教科となるでしょう。



葉っぱや木の実で遊ぶ物を作ろう

Q&A 区立学校の適正規模化・適正配置

千代田区が、去る十二月二十日に発表しました「千代田区公共施設適正配置構想」のうち、区立学校の適正規模化・適正配置の内容については、教育広報「かけはし」号外や、広報「千代田」でお知らせしてきました。今号では、保護者の皆さんにこの構想についてさらにご理解を深めていただくため、Q&Aの形でそのあらましを特集しました。

「千代田区公共施設適正配置構想」とはどんな構想ですか？

まずは、子どもからお年寄りまで、幅広い年齢層の人々が住み、働き、学び、活気にあふれているのが本来の姿です。

幸いなことに、都心千代田区には、多くの文化施設や最新の情報があふれており、都心に生活することのすばらしさを味わうことができる要素が整っています。

しかし、残念なことに、現在わたしたちの千代田区には、いわゆる「生活するまち」としては、さまざまな問題が生じつつあります。このような状況を打開し、みんなが千代田に住み続けられるようにするためには、千代田区を根本的につくり直す必要があります。

そこで区では、高齢化・情報化・国際化など急激な社会の変化に対応したまちづくりを実現し、区民サービスの向上をはかるとともに、定住人口の回復をめざし、区の存亡をかけて「千代田区公共施設適正配置構想」を策定しました。この構想は、「二十一世紀に向けて、現在ある区の公共施設のすべてを、新しい発想と

全区的な視野から全面的に見直し、よりよい区立施設に再編整備しようとするものです。

千代田区は、この構想のもとに、今後十年間にわたって、定住人口五万人回復を目標に、魅力あるまちづくりを推進していきます。

児童・生徒数の減少が著しい区立学校についても、小規模化にともなう教育水準の低下を防止し、将来にわたって区立学校に学び、生活する子どもたちに適切な学校教育を確保できるよう、全区的観点から規模を適正化し、再編整備することになりました。

なぜ区立学校の適正規模化・適正配置が必要なのですか？

千代田区における幼児・児童・生徒数は、都心部の人口減少が続く中で、昭和三十年代後半より減少の一途をたどってきました。平成三年度においては、昭和三十年代のピーク時に比べ、小学校の児童数は七割、中学校の生徒数は六割も減少しています。

現在、千代田区立の小学校の中には、一学年の人数が十人を下回っているところもあります。また、一学年一学級の、いわゆる「単

〔児童・生徒数の推移〕

生徒数	児童数	
7,424人 (昭和37年度)	12,728人 (昭和30年度)	ピーク時
2,864人	3,785人	平成3年度
約1,200人	約2,300人	平成13年度(予測)

学級校」も平成三年度には五校となつています。千代田区では、多角的な人口増加策により十年後の平成十三年に定住人口五万人回復をはかっていますが、それでも世帯構成の変化や全国的な出生率の低下などにより、学級や学校の小規模化が今後いつそう進むものと予想されます。こうした状況の下では、千代田区の学校のゆたかな教育水準の維持が大変困難になってきます。



Q&A 区立学校の適正規模化・適正配置

教育委員会では、「どうしたら子どもたちの教育環境を守り、向上させていくことができるか」をテーマに、昭和六十年から検討を開始。有識者・学校関係者による教育条件検討会を設置し、区立学校における適正規模の確保・適正配置に向けて議論を重ねてきました。

おりしも、千代田区内の全ての公共施設を白紙の状態から再編整備する「千代田区公共施設適正配置構想」が策定されることとなり、区立学校の適正規模化・適正配置についてもその一環として推進していくことになりました。

これにともない、現在十四校（園）ある小学校・幼稚園は、平成五年四月から「新たな小学校・幼稚園」八校（園）に生まれかわります。現在五校ある中学校は、平成八年四月に「新たな中学校」三校に生まれかわります。

なぜすべての区立学校を

「廃校」にするのか？

このたび、区の存亡をかけて策定した「千代田区公共施設適正配置構想」において、二十一世紀に向け、全区的観点から区の全ての公共施設を見直すことになりました。この構想の一環として、区立学校についても将来にわたり安定的な学校教育の展開が維持できる規模を想定した上で、適正配置することになりました。それにより、現在の区立学校を全て



「廃校」とし、小学校八校・中学校三校を新設するものです。

いま、区立学校において何よりも大切なことは、現在学んでいる子どもたちや、将来区立学校に学ぶ子どもたちに、よりよい教育環境を整備することです。

学校教育には、子どもの社会性を育て、個性を伸ばす——やがて社会人となるための基礎づくりをする——という大きな目標があります。このまま子どもの人数が減少し、学校が小規模化しますと、子どもたちの交友関係もごく限られたものになってしまい、社会性の育成という面において、教育効果に大きな問題が出てきます。

クラス替えが行なわれ、活発なグループ学習もでき、多勢の友だちと知りあい、切磋琢磨しながら楽しい学校生活をおくることが、子どもたちにとっては何よりも大切なことです。現在百人をこえる児童がいる学校でも、世帯構成の変化や出生率の低下などにもない、今後急速に人数が減っていくことが予想され

ます。

従って、将来にわたり千代田区の学校に学ぶ子どもたちに、適切な教育活動を展開し、教育水準をいっそう向上させていくためには、学校の規模の適正化をはかることが不可欠です。これにより、学校の建物がなくなったり、校名が変わったりしますが、千代田区のそれぞれの学校で培われてきた歴史と伝統を大切に引き継ぎ、今後それらをふまえて「新たな学校」における教育内容を充実させていくことにより、いっそう発展させていきます。

適正配置の時期が幼稚園・小学校と中学校と異なるのはなぜですか？

教育水準の低下を防止するためには、できるだけ早い時期に適正配置を行うことが望ましいと考えています。

現在中学校においては、幼稚園や小学校ほど小規模化の状況は深刻ではありません。しかし、いま幼稚園や小学校に在籍している子どもたちが中学校に進学するわけですから、中学校においても生徒数の減少にともなう小規模化が深刻になってくることは明らかです。また、施設面についても、「新たな中学校」のスタートにあたっては、大規模な整備を要します。

こうした観点から、適正配置の時期を、幼稚園・小学校は平成五年、中学校は平成八年としました。

学校の適正規模について

具体的に説明して下さい。

学校教育では、「集団生活を通しての社会性の育成」と「個性を生かした教育の推進」などに努めることが大切です。そうした観点から、よりよい学習環境や生活環境を整備する必要があります。また、公立学校としての適正な教育活動の推進や学校運営上の観点なども考える必要があります。従って、学校は次のような規模が適正と考えます。

一校あたりの学級数は、クラスの編成替えによる新しい教師や友人との出会いと豊かな体験、複数の学級によるクラス間の切磋琢磨と連携協力、クラブ活動の運営や教員等指導組織の充実——などの観点から、小学校では、一学年二学級から三学級は必要。中学校では、一学年四学級から六学級は必要となります。また幼稚園では、各年齢一学級から二学級が必要となります。

また、一学級あたりの児童・生徒数は二十から三十人前後が、幼児数は二十人前後が適正な規模となります。

「新たな学校」の通学区・位置はどのようにして決めたのですか？

「新たな学校」は小学校八校・中学校三校とし、その通学区は、児童・生徒の居住分布

や交通安全、さらに地域コミュニティなどの状況に配慮した上で決定しました。

また、「新たな学校」の位置については、学校を地域コミュニティ施設として位置づけるという観点から、可能な限り各通学区域のほぼ中央に位置させるという原則のもとに決定しました。

適正配置によって、通学・通園距離が延びるという点が出てきますが、子どもにとって問題はありますか？

学校（園）の数が少なくなるので、通学・通園距離が延びるところも出てきますが、通学・通園に支障が生じるほどのものではないと考えています。

むしろ、適正規模化・適正配置によって、友達が増え、教育内容も充実し、施設・設備も改善されるといったプラス面に目を向ければ、すばらしい学校生活になるといえます。なお、交通安全教育などにも万全の配慮をしていきたいと考えております。

「新たな学校」の校名・校章・校歌などはどのようにして決めるのですか？

全区的な視点からすべての区立学校を見直すことによりスタートする「新たな学校」ですから、現在の校名・校章・校歌などは使わないものとします。

現在のところ、「新たな学校」の仮称として第一、第二などの番号が使われていますが、これは校名が決定するまでの便宜上のもので、そのまま正式な校名となるということではありません。

「新たな学校」の校名・校章・校歌などの決定にあたっては、地域の皆さんをはじめ、PTAや同窓会の皆さんと協議する場をつくっていききたいと考えています。地域の特色を生かし、みんなにいつまでも親しまれる素晴らしい校名・校章・校歌が誕生することを願っています。

小・中学校における国際理解教育を今後どのように進めていきますか？

国際交流を通じて児童・生徒の国際感覚を養っていくため、これまでも中学生の海外交流事業をはじめ、さまざまな取り組みをしてきました。

社会の各方面において国際化が進展していく状況の中で、千代田区の地域特性を考えますと、今後ますます国際理解教育が重要になってきます。「新たな学校」では、近隣にある外国人学校や海外の学校との交流を活発に行い、外国人教師を活用するなど、国際理解や外国人との友情・親善・協力といった意識を高める教育を進めていきます。

また千代田区は、文部省より「帰国子女教育受入推進地域」の指定を受け、これまでも



「みんな元気で歩こう会」のご案内



4月、誰もがすがすがしい気持ちで、新しいスタートを迎える時です。新学期最初の日曜日、体力づくりもかねて、満開の桜をながめながら千代田の自然の中を歩いてみませんか。多くの方々のご参加をお待ちしています。

と き 平成4年4月5日(日) 午前9時30分 区役所前出発

コース 皇居内濠一周 約6km
(区役所前→千鳥ヶ淵→半蔵門→桜田門→大手門→竹橋→千鳥ヶ淵)

参加資格 区内在住、在勤、在学の方なら、どなたでも参加できます。
人数の制限はありません。

申込み 当日午前9時から区役所前で受付(参加無料)

問合せ スポーツ振興課(内神田2-1-8 総合体育館内) Tel (3256) 8444

「今日の給食は、いつもの倍もおいしいよ。」
と、はしゃぐ子どもたち。
「孫の元気な学校生活を見て、一緒に給食を食べることもでき、ほんとうに満足しています。ひ孫が小学校に入ったら、そのときはぜひまた招待して下さいね。」
と、ほほえむおじいちゃん。
楽しい会食がすすむうちに、みんな自然にうちとけ、教室の雰囲気もなごやかになっていきます。
給食のあとは、お年寄りから折り紙を教えていただいたり、一緒にお



みんなほのぼの「ふれあい給食」



給食を通じて、お年寄りや地域でお世話になっている方々との交流をはかる「ふれあい給食」が、各小学校で行なわれています。給食にお招きしているのは、児童の祖父母をはじめとして地域の高齢者の方々、あるいは町会・消防署・警察署といった日ごろお世話になっている方々。富士見小では、お孫さんとの給食を楽しみに、遠く青森や新潟から上京されたおばあちゃんもいらつしました。



すごい！私にもお手玉教えて!!

学校栄養士さんのワンポイントアドバイス

すね。いり卵や目玉焼き、ゆで卵、あるいは簡単なスティックサラダなどを加えると、栄養価はグリーンとアップします。また、コーヒーや紅茶を牛乳やフレッシュジュースにするなど、ちょっとした工夫次第で栄養のバランスも良くなります。

朝食は一日のはじまりです。勉強やスポーツに十分に力を発揮するためには、朝食は欠かせません。一日の活力の源となるものですから、毎日きちんと食べたいものです。朝食をぬいてしまう理由は、第一に、夜ふかしをしすぎて朝起きられないので、食べる時間がない。第二に、夜寝る前に間食をして、それが朝まで残ってしまいうために、朝食時になっても食欲がないことなどがあげられます。まず、朝三十分早く起きることからはじめてみましょう。そして、さわやかな気分で行く朝食をとりたいたいのです。内容も、単にコーヒーとトーストだけではなく、栄養のバランスも考えたいです。

Q&A 区立学校の適正規模化・適正配置



帰国および外国人児童・生徒の受け入れを積極的にすすめてきました。
そこで、いままですべての成果を十分にふまえ、いっそう充実させて新しい時代のニーズに添えていくため、「新たな学校」のスタートにあたり、いわゆる「国際学校」の性格をもたせた小・中学校を拡大していきます。帰国および外国人児童・生徒と他の児童・生徒が同じ教室で学び、生活していくなかで、異なる文化や生活習慣をお互いに認め、理解しあうことを通じて、国際社会に生きる一員としての資質や能力の育成をはかっていきます。

「コミュニティスクールとはどんな学校ですか？」

学校施設が、単に学校教育の場にとどまらず、地域に開かれた、コミュニティの核として皆さんのふれあいの場となるよう、これまでも学校施設の地域開放を積極的に進めてきました。

そこで、新たに改築する学校ではこうした考え方をさらに進め、コミュニティスクールとして発展させていきます。具体的には、学校教育に支障のない範囲で体育館・温水プールなどの体育施設や、音楽室・家庭科室などの特別教室を地域の皆さんに利用していただき、身近な文化・スポーツ活動の場として活用していただきたいと思います。

また同時に、学校教育においても、伝統芸能の紹介・継承を通じ、地域社会とのつながりを深めていきたいと考えています。

「新たな学校」に併設される施設はどんなものですか？」

この構想にもとづく新しい施設につきましては、限られた区有地を有効活用し、区民の皆さんの多様な要望に応えた区民サービスを展開するという観点から、施設の複合化をすすめていきます。

「新たな学校」建設にあたっては、学校教育

育に関連の深い図書館・体育館といった生涯学習施設などとの複合化をはかっていきます。それぞれの施設のもつ機能を互いに共同活用することにより、学校施設を単独で整備する場合よりも、より高度で多くの機能をもつ教育施設として整備することができそうです。学校に併設される施設は次のとおりです。

学校名(所在地)	併設される施設
(仮称) 第二小学校・幼稚園 (三番町十六)	・児童館 ・地域事務所
(仮称) 第四小学校・幼稚園 (富士見一十一三)	・保育園 ・児童館 ・まちかど図書館
(仮称) 第六小学校・幼稚園 第三中学校 (神田司町二一・十六)	・教育研究所 ・まちかど図書館 ・国際交流センター ・地域区民館 ・ストックヤード
(仮称) 第七小学校・幼稚園 (外神田三・四一七)	・保育園 ・児童館 ・まちかど図書館
(仮称) 第八小学校・幼稚園 (神田和泉町一)	・保育園 ・まちかど図書館 ・パークサイドプラザ
(仮称) 第一中学校 (平河町二一五一一)	・地域体育館 ・まちかど図書館

きょういく随想

きょういく随想

児童期はまさに「ギャング・エイジ」だった。ギャングとは、結束の固い「遊び仲間」のことである。ギャングは日が暮れるまで、路地裏や空き

地で遊んだ。弟妹の子守りをしながら、遊びに加わる子供もいた。

チャンバラ、かくれんぼ、鬼ごっこ、花いちもんめ、縄跳び、ペイゴマ、お手玉：等、ギャングの遊びには、群れをなして遊ぶ、体を動かす、遊び道具を作る、という特徴があったので、子供は遊びに没頭しながら、自然に体力・運動能力を鍛え、仲間内の規律や役割を知り、想像力や創造力を働かせていた。こんな場面ではどのように振る舞えばいいかというと、「人生の知恵」のABCは、遊びの中で学ぶことができた。

経済の高度成長に逆行する形で、ギャングの影は次第に薄くなり、今日では消滅状態に近い。

ファミコン、テレビゲーム、ロボット、ジグソーパズル：等、これらの遊びは、集まりはあっても「ふれあい」の少ない、マイペースの遊びである。子供たちの人間関係の経験はますます少なくなってきた。

そのためか、人付き合いの仕方が分からない、コミュニケーションが苦手だ、という子供が多くなった。他者と絶縁し、自分の殻に閉じこもる孤立化の傾向は、各年代層に広がっている。

最近新しい知識や技術を覚える

ギャングの復活

教育委員

横山 安宏



ことに、追いかけられている。めまぐるしく変化する社会で活躍しよう

と思えば、個人の力では歯が立たない。さまざまな知識、経験、技能、人柄の持ち主とチームを組む必要がある。他人とのかかわりを避けていては、折角の天分も花が開かず、「宝

の持ち腐れ」に終わるおそれがある。

子供が多忙になった。総務庁の平成三年版『青少年白書』によると、

中学生の平日の勉強時間（学校の授業も含む）は九時間八分、小学校四

（六年生でも七時間をこえている。幼児のお稽古（けいこ）とも盛んである。子供たちは、決められたレールの上を

ひたすら走っている。反面、自分で判断し行動する「自由時間」が減った。

言われる前に体が動いた昔の子供、言われなければ動けない今の子供、

若者の中にも「指示待ち人間」が増えている。

社会の進展は元に戻せないし、誰も戻ることを望んではない。だが、

子供の世界には、昔の「ギャング」を復活させなくてはならない。子供

が群れをなして、創意工夫を凝らし、全身を使ってダイナミックに躍動す

る、それができる条件を備えているのは、今のところ幼稚園・学校である。

学級・学校規模の適正化は、急がなければならない。

よこやま やすひろ
平成3年から教育委員
元区立小学校長・園長

編集後記

◆春、別れと出会いの季節です。母校を巣立っていく卒業生たちが、友だちや先生との名残（なごり）を惜しむ光景があらちちあらで見られます。

別れは、つらく寂しいものですが、今までに培ってきた友情という固い絆（きずな）は、卒業しても決して絶えてしまふものではありません。それぞれの道に進み、離れてしまっても、今までと違った角度から互いを見つめあうことにより、いつそう親密な関係へと発展させることができるのです。

さらに、そうした貴重な財産（いしずえ）に、新しい世界でよりよい人間関係を築きあげ、大きく成長してほしいものです。夢多き未来に向けて今旅立っていく卒業生たちに、心から声援をおくります。

◆教育広報「かけはし」について、ご意見・ご感想がございましたら、ぜひお寄せ下さい。お待ちしております。

教育広報「かけはし」第三号

平成4年3月19日発行

編集発行／千代田区教育委員会

〒102 千代田区九段南1-6-11

☎(03)2664-0151 内3114